

特集

座談会

第1世代・第2世代が考える総合型クラブの未来 ～人材確保・育成を中心に～

持続可能な総合型クラブの運営には、効果的な事業計画を企画・立案できる人材が求められるとともに、常に次世代の育成を念頭に新しい人材を積極的に受け入れ、世代交代を図りながらクラブ運営に取り組むことが重要です。

そこで今回は、総合型クラブの現場で活躍されている第1世代・第2世代の方々に、総合型クラブの人材確保・育成を取り巻く現状・課題を中心にお話いただきました。



【第1世代】

関口 昌和 氏（よろずや広島北 ゼネラルマネジャー/写真中央）

【第2世代】

増田 康太 氏（NPO法人 クラブしっきーず クラブマネジャー/写真左）

森田 弘美 氏（一般社団法人 N-link. 代表理事/写真右）



1

クラブに携わった経緯について

増田(敬称略) 小学校4、5年生の頃からしきーず(クラブ)のクラブ会員で、それから約20年たってクラブマネジャーという立場で現在関わっています。前任のクラブマネジャーが退職されたことが、クラブマネジャーとなったきっかけではありますが、最初は熱い思いがあったわけではなく、クラブに長く関わってきたこともあり、何となくお手伝い的な感覚で始めたと記憶しています。ただ、今は、地域にとって、子どもたちにとって、クラブが必要だという思いがあり、「クラブとして未来に何を残していくか」と考えるような心境に変わっています。

森田(敬称略) クラブ設立翌年の平成24年度から関わっています。元々、スポーツ少年団でバレーボールの指導者として活動していたところ、クラブからお声掛けいただき、運営委員兼指導者としてクラブに携わるようになりました。クラブ設立当時は、教育委員会の主導でクラブが立ち上がったこともあり、運営委員の人数が多かったことから、委員間や教育委員会との調整が大変であり、本来行うべきクラブ活動も効率よく行えないような状況でした。そんなとき、クラブマネジャーが辞め、運営委員も総入れ替えとなり、結果的に私が代表となりました。私が代表になってからは、クラブの規模を縮小して、本当にクラブに携わりたい人だけを集め、地域にあった地域のためのクラブづくりを始めました。

関口(敬称略) 広島県で平成15年3月に設立した「どんぐりクラブ屋台村」が最初に関わったクラブです。今回の座談会のテーマでもある「人」という点で話すと、このクラブを作ったとき、「10年経ったら、役員を全員入れ替えよう」という話をしました。その理由は、役員が変わっていない組織は、発展していないように見えたからです。また、私が地元の間人ではないからこそ、そこまで強く言えたと思っています。地元の間人だけがクラブに関わっていると、ある意味、人間関係が既にでき上がっていることや、固定観念に囚われてしまうことが考えられ、クラブがなかなか発展していかないようリスクもあると思います。同じように、スポーツに関わっている人間だけで運営していくのも良くないと思います。スポーツだけを中心に物事を考えてしまう可能性があるからです。当時、設立準備中に、ある方に「スポーツする人って少ないんだよ」と言われ、ドキッとしたことがあります。このような経緯もあり、理念としては、「総合型地域スポーツクラブ」ですが、クラブ名には、あえて「スポーツ」という言葉を入れず、スポーツをやらない人も関わりやすいようなクラブを目指し、スポーツ以外の様々な活動も行うこととしました。

2

人材確保のポイントとは？

増田氏 将来クラブに関わる「子どもたち」の主体性と多様性を育成する

森田氏 主婦のアンテナを活用し情報収集

関口氏 クラブ側の視点を少し変えることで人材確保の幅を広げる

増田 「クラブは、楽しいところ」という認識を持ってもらうことが必要だと思います。特に子どもの場合、将来的にクラブに帰ってきてもらうためには、前述の認識を持ってもらうことと併せて、主体性を持てるような育成が必要だと思います。今、しっしーずでは、子ども対象のプログラムで、子どもたち自らが、「こういうことをやりたい！」と考えるような仕掛けづくりをしています。子どもたちが考えたアイデアは、突拍子もなく、時間もお金も手間もかかる内容が多いです。しかし、そのアイデアを「できない」で終わらせるのではなく、「どうやったらできるのか」という投げかけをすることで、子どもたちが主体性を持ち、またより良いアイデアがでてくるようになります。このような主体性を持てるような仕掛けづくりをすることで、子どもたちの成長を長い目で追うことができるとともに、クラブの活動に自然と関わっていけるような環境を大切にしています。

また、将来、子どもたちが、スポーツを指導できる人として帰ってくるのではなく、障がい者や認知症の方々等に対し、特別視することなく、地域には多様性があるという認識を当たり前のようになっていることが理想だと考えます。そのためにも、小学生のうちに、様々な多様性に関わる経験ができるようなアプローチが重要なのではないかと思います。

森田 地域の中で、誰か関わってくれる人がいないか、常にアンテナを張っています。その中で、最も着目しているのが主婦の方々です。主婦のネットワークは半端ないです(笑)。例えば、同じ主婦の中にアーティストの方がいるという情報を得ると、「ああこの人いいな」って感じで目をつけています。また、主婦の方々は、子どもの面や家庭の面等、様々なジャンルで地域と密接しているため、面白いアイデアをたくさん出してくれます。他にも、企画の実行にあたり、全員が大した打ち合わせもなく完璧に準備してくれるような、きめ細かさも持っています。また、主婦だどご主人がしっかりした仕事をなさっている場合、歩合制で謝金を払うことができるので、クラブの財政面においても、非常に助かります。



ただし、人材確保のために、主婦の方々、誰でもお声掛けするというわけではありません。私のクラブでは、「年配の方に優しい」、「子どもを大事にする」、「姑さんと仲が良い」この3つをクリアする人が合格です。ですので、ある意味、いい人しかいないですね。

関口 人材確保のためには、ネットワークを広げることが重要です。核となる人、1人のアンテナだけだと、どうしても物理的に優秀な人材を確保することは困難です。今は、「みんなでクラブを支える」というシステムが必要になってきていると思います。周りの人たちのネットワークを活用して、上手く機能させることで、人が人を呼び、街づくりになっていく—この街づくりという部分において総合型クラブが使命を果たしていくような

時代になるのではないのでしょうか。また、多様な社会的背景を持つ方々に目を向けるのも人材確保の幅を広げると考えています。実際に私のクラブであったのですが、私の教え子の20代の女の子が広島に帰ってきたという情報を得たので、クラブに関わらないかと打診しました。すると、彼女は「私はクラブに関係ないし、地域に興味がない」と素っ気なく言いました。私は、その時、「クラブにも、地域にも興味がない人こそ、クラブの地域課題を解決するためにはクラブに必要なのではないか」と思い、再度打診しました。結果、彼女はクラブの運営にはまり、クラブの活動にとっても貢献しました。このように、クラブ側の視点を少し変えることも、人材確保のポイントとなるのではないかと思います。

増田 関口さんがおっしゃった、「みんなでクラブを支える」という考えは、共感できます。私のクラブでは、有償かつ専任のスタッフは私だけです。他の若手のメンバー(スタッフ)は、それぞれ仕事を持っていて、アフター5や土日の時間帯にクラブに携わっています。そのため、クラブに携わる全員がクラブマネジャーとしてクラブを引っ張っていくようなやり方が、これからの時代には合っているのではないのでしょうか。

関口 人材に困っているクラブは多いですよ。次世代を担う人材がなかなかいないと思っていましたけど、お二人の話を聞くと、人材は結構いるんですね。人材に困っているクラブは、地域のネットワークが上手く機能していないことが原因だと思います。増田さんがおっしゃるように、本業があっても、できる範囲でクラブに携わっていただくことが大切ですね。また、田舎は特に、消防団、伝統芸能、地域の事業や催し物等に深く携わっている方も多いと思うので、そのような時間的制約から、クラブに携わることが難しい人もいるのではないのでしょうか。



増田 「できる範囲で」というのと併せて、クラブの活動から仮に離れて行ったとしても、また戻ってこられるような雰囲気づくりは大切にしています。結婚や出産、転職等、クラブを離れる機会は誰にでも訪れることだと思います。そのため、「いつでも戻って来ていい」という雰囲気づくりは、ある意味、永続的な人材確保のポイントとなるかと思っています。

3 人材確保のためにクラブの魅力をどう伝えるか

森田氏 クラブの現場を見て何か感じ取ってほしい

増田氏 クラブは、その人の居場所づくりでもある

関口氏 肝心なのは個人の「出番と居場所」の確保

森田 特に、若い人にクラブに関わってもらうためには、クラブの活動を見てもらうのが一番です。クラブの活動を一緒に体験してもらい、どう感じてもらえるかが大事な部分かなと思っています。クラブが求める人材は、運営、子どもの指導、高齢者の指導等といったように様々です。指導者資格に限らず、その人の適正を見極め、その人に合った役割があれば、携わっていただくようにしています。また、資格は持っているけれど、活動する場がない人がいます。沼田町は人口約3700人の町ですが、看護婦、栄養士、保育士、役場を辞めた保健士等がかなりいらっしゃいます。そのため、先ほどの主婦のネットワークを使い、活動意欲がある方々を見つけ、声をかけるようにしています。地域には、意外と多くの資格保有者がいるのです。



増田 私は現在、理学療法士の資格を取得するため、専門学校に通っています。私の通う専門学校には、埼玉県外から来た関東近県や東北地方出身のクラスメイトがいます。そのクラスメイトを、しっくいずの夏のキャンプのプログラムに誘いました。そこで、川への飛び込み大会を実施したのですが、アメフトをやっていた身体の大きい学生が飛び込むと、すごい水しぶきが上がります。それを見た子どもから歓声があがると、参加したクラスメイトも嬉しい気持ちになります。県外出身の若者が、クラブのプログラムに参加することで、今までとは違った友達や顔見知りが増えていきます。そんな居場所づくりとしてもクラブの存在は貴重だなと感じています。まずは楽しいことを経験していただいて、「しっくいずに行ったら楽しかった」、「もう一回行きたい」というふうにしていただく事が、一番なのかなと思います。

関口 森田さんのところに人がたくさん集まるのは、『出番』と『居場所』をつくっているからだと思います。主婦の方々は、家の中に限った『出番』と『居場所』はたくさんあると思いますが、社会に出たときの『出番』と『居場所』は、中々見つけれられないのではないのでしょうか。おそらく森田さんが、主婦の方々に対し、「あなたはこれね」、「あなたしかできないからね」と言っているのでしょう。「あなただからお願いしてる」と言っ、て、『出番』をつくれれば、その人の『居場所』ができる。クラブに携わるみなさんの『出番』と『居場所』をつくるのが、人材確保のポイントでもあり、クラブの魅力になると思います。『出番』と『居場所』さえあれば、その人は輝きます。

森田 クラブには、保育園児から高齢者まで会員がいるので、そこで元気な大人を見せることが一つの魅力になると思います。子どもたちから「森田さんみたいな仕事したいな」と言われたことがあります。そんなとき、普通に元気な大人を見せることだけで、魅力になっているのだと感じますね。また、時々他のクラブの若い子がクラブに来て何泊かするんですが、悩み相談とか受けますね。「クラブは何でもできる場所だし、これから好きなことができるよ。今辞めることはないよ。辞めるのは簡単だから、この先も是非続けて面白いこととしてごらん」なんて言ってます。悩み相談が魅力かどうかは分かりませんが、多種多様な方々と気軽に交流できるようなクラブ間同士のネットワークは、若手にとっては魅力となるのではないのでしょうか。



関口 現実的には、人材確保のためには、財源の確保が必要だと思います。会費は安定財源です。しっかりとしたプログラムを行い、それに見合った対価をもらうという基本的方針が、これからはもっと必要になってくると思います。少子高齢化等の影響により、行政も財源が減っていくことで、意図した事業ができなくなることが考えられます。財源の確保と併せて、最近のクラブは、地方の規模の小さいクラブと、人材を多く必要とするような規模の大きいクラブという二極化の傾向になっているのではないかと思います。どちらを選択するかというわけではありませんが、クラブの方向性はしっかりと定める必要があります。中途半端に色々な事業に手を出してしまうと、クラブの規模を大きくしたいのか、現状維持か等、方向性がぶれてしまうと思います。そのような状況だと、どういう人材を求めているのかも分からなくなってしまいます。クラブのミッションとビジョンをしっかり持つことが何より大事だと思います。

4

クラブが必要とする人物像とは

森田氏 資格よりも人柄・性格が大事

増田氏 分け隔てなく愛情を注げる人

関口氏 真面目で嘘をつかない人

適切な人材教育ができる人こそクラブマネジャー

森田 資格が有るか無いかは、クラブの会員からそこまで求められていません。知識・技術が有る方が間違いなくありがたいのですが、コミュニケーション能力が低ければ、参加者の満足度は低くなります。たとえ、資格が無くても明るく元気で、参加者を大事にする人の方がいいですね。参加者は、楽しい場所、魅力的な人に集まると思います。

増田 クラブ代表でもある母には、「全ての人に分け隔てなく愛情を持って接する。そこを大切にしたいよね」と、よく話し合います。私は、多様な方々を受け入れる、いわゆる差別をしないことにすごく時間を割いてきました。日常的な業務に追われている中で一番大切なのは、クラブに来てる目の前の人にちゃんと時間をかけること、尽くすことなのではないかと思っています。それができているのは、自分が日常的にいろんな人たちから愛情を受けているからです。だからこそ自分も変わることができました。分け隔てなく愛情を注げる人。そんな人を求めますね。

関口 真面目で嘘をつかない人ですね。魅力的な指導者に人が来るという話がありましたが、魅力のある指導者は、自分に魅力があると思ってしまうがちです。民間企業だったら、自分の魅力をどんどん出して「私についてきて。私が一番。」という意識で良いと思うのですが、クラブでは違うと思います。一番大事にしなければならないのは、会員さんです。会員のみなさんに対して、誰がやっても同じような指導をしなければいけないと思うのです。

指導者に対してそのような意識付けを教育するのが、クラブマネジャーだと思います。また、「私がいるからこのクラブは大丈夫」であったり、「私がいるからこれができるんだ」というような意識の指導者やクラブマネジャーは、求めないですね。



6

クラブに携わっている 第1世代、第2世代に伝えたいこと

関口氏 第2世代は、新しいことにチャレンジしてほしい

増田氏 第1世代の経験を伝承した上で新陳代謝を

森田氏 第1世代の知識を生かしつつ地域を育てたい

関口 私も当時は、第1世代の方々に好きにやりなさいと言われました。40代前半に広島県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会の代表委員にもなりました。周りの先輩方が「若い人を出さなきゃだめだね」ということで選任されましたが、やはり第1世代の方々が、第2世代の考えや行動を尊重することが大切ですね。私は第2世代かもしれませんが(笑)、ぜひ若手の方々に、どんどん新しいことをやってほしいですね。

増田 今までいた第1世代の方々がクラブを去っていく中で、若い人がどんどん入ってくれば世代交代かという、そうではないと思います。戦後の復興をしてきた第1世代の方々の人生の経験とかノウハウを、第2世代の若手がしっかりと伝承した上で世代交代する必要があると思います。

森田 地域を大事にしないといけないなと思います。地域のことを知らない人は、地域をうまく回せません。地域愛の強い人が結局クラブに携わっていると思います。その方々のネットワークを生かし、地域には人材が溢れていることを、しっかり理解した上で、地域を育てていけたらなと思っています。



増田 康太氏

小・中学校時代をクラブ子ども会員として過ごし、成人後、地元の志木に戻る。現在はクラブマネジャーとして、“かつての子ども会員”や同級生に積極的な声かけをし、クラブの企画・運営に若い世代が関わりはじめている。将来は、「クラブマネジャー×理学療法士=パラレルキャリア」の確立を目標としており、専門学校(理学療法学科・夜間課程)に通いながら、『スポーツと福祉の融合』をテーマに、日々活動している。

関口 昌和氏

平成3年日本体育大学卒業後一般企業に就職。その後広島県旧豊平中学校で保健体育教員として赴任。平成8年旧豊平町教育委員会体育主事となり、平成12年総合型地域スポーツクラブと出会い、4つの総合型地域スポーツクラブ設立に係る。広島経済大学、広島市立大学の非常勤講師として総合型地域スポーツクラブとは何かを学生にも伝えている。

森田 弘美氏

小学生からバレーボールを始め、高校卒業後は東北パイオニアで実業団選手として活動。引退後、地元に戻り、総合型地域スポーツクラブに携わるようになる。クラブ運営にあたっては、地元の人を大切にしながら、地域の人と人をつなぐ安心できるクラブ運営とともに、子どもたちがたくさんの経験を通し、地元に戻ってきたくなるようなクラブを目指している。